

# 米国の幼児教育における五つの実験(六)

大戸 美也子

## 五 ヘッド・スタート・プログラムの考察

どのような教育や福祉の政策も、その基本に、人間の「幸福」や、幸福を「生み出す」あり方について、一定の考え方を反映しているものである。幸福というものは個人的なものであり、個人に内在する潜在力が熟することなのであるか。それとも、幸福とは社会的なものであり、自ら属する社会の性格と社会適応の基準を認識し、その基準に適合することなのであるか。あるいはまた、それは、個人・社会的なものであって、個々人の異なる潜在力が熟し、それらが相互に生かし合える共同体を創造することなのであるか。ヘッド・スタートは、この三つの幸福観のどれを政策の基底としたものであるか。

幸福を「生み出す」あり方についてもさまざまな考え方があ  
る。——幸福実現の推進力は、すべての人間に等しく備わって  
るので、自然に出てくるのを待てばよいというものだろうか。そ  
うではなくて、特定の技術や物等によって生起されるような管理  
のことだろうか。また、特別の技術や環境は、どの個人にとって  
も同じように機能するのだろうか。それとも、個人によって異な  
るのだろうか。ヘッド・スタート・プログラムは、どのような立  
場をとって、その推進原理としたのだろうか。

### ヘッド・スタートの仮説

一九六〇年の前半、アメリカの教育界は少なくとも二種類の大きな課題に取り組みなければならなかった。第一は、急速に拡大

する高度の技術をこなす人材を大量に、効果的に生産する方法を編み出すという仕事であり、第二は、子どもの思考過程や動機付けについての新しい考え方、あるいはそれらに影響を与える変数についての研究成果を集合して、教育実践にとり入れる試みをすることであり、そして、第三は、義務教育のレベルからはじまるおちこぼれの生徒を少なくする特別の指導法を開発する仕事である。第一の仕事は、主として高等教育レベルで数学、物理、語学等のカリキュラムの抜本的改善という形ですすめられ、第二の仕事は幼児教育レベルが中心となつてすすめた多数の実験的教育プログラム、第三の仕事は主として都市のゲットー地帯や南部黒人の居住地の義務教育レベルの改善プログラム (Deitgen, 1964; Grey, 1963) にそれぞれの成果を認められる。初め、三つの教育課題は、それぞれの教育段階がひとつずつ分担するような形でとり組んでいったが、やがて相互に浸透し合い、三つの教育課題を基本的要素とする総合的プロジェクトの志向が芽生えてくるのである。ヘッド・スタートが誕生したのは以上のような状況であったことにまず注目したい。

ここでは、三つの教育課題がヘッド・スタート方法等に、どのように反映しているかという観点から、その構造を分析してみた。

ヘッド・スタートは、すでにみたように、「一定所得水準以下の子どもたちを対象に、彼らに不足するものを多面的に補うこと」によって、中流階級の水準に近づけ、それによって、学校への適応を高めようとする政策」である。

すなわち、このプログラムのねらいは、「学校の適応」にあるが、これは、最終的に高度技術社会への適応(教育課題の1)を強く志向していることは明らかである。また、このプログラムは方法として「不足を補う」という発想をしているが、これは個人の入力(刺激)の不足、すなわち出力(知的、社会的、情緒的不足)に通ずるといふ仮説を前提として、入力の平等化をめざしている点で、認知獲得過程における環境の役割を重視する立場と共通している。言いかえれば、目標遂行の原理の中に、第二の教育課題をとり入れているということができよう。ヘッド・スタートは特定の子どもを対象としている点で、第三の教育課題に応えたプログラムであることは自明である。以上要約すると、ヘッド・スタートは、貧しい子どもたちの幸せは「社会適応」にあり、「外界」からの刺激によってその幸せは実現できる、という基本的な仮説に基づいてすすめられているといえるのである。もし、このプログラムに何らかの問題があるとすれば、技術的な側面の検討にもまして、この基本的仮説について検討をしていかなければ

ばならないと考えられる。

#### 目標実現のストラテジー

児童発達センターは、地域社会の人的、物的な資源の集約をはかる一方で、これらの資源を子どもの入力(刺激)として再編成するという媒介的な機能を持っていた。センターの設置については極めて大まかな基準しか設けられていなかったため(sog)、すでにみたように、多様な場所で、さまざまな規模で開設されたのであるが、地域社会、親、子どもたちへと門戸を開くことによつて、子どもをとりまく大人のあり方に一貫性をはかろうとした点は注目に値する。センターのスタッフは従つて、子どもたちのかかわりだけではなく、地域社会の子どもとかかわるさまざまな大人や母親との、発展的な役割のとり方も期待された訳である。しかし、ある夏突然に、二千五百の児童発達センターが開発されたため、十分に訓練されたスタッフを得ることは極めて困難であり、センターの内外をつなぐ媒介的な役割は必ずしも機能しなかったという事は、多くの識者の指摘しているところである(Hunt, 1976; Klein, 1973; Smith and Bissell, 1970)。地域社会のさまざまな教育的事柄や人々の役割を、学校教育の中にとり入れて生かすというアイデアは、アメリカの教育の伝統の一部をな

すものであるが、これを意識的に、継続的に組織していくためには、その任にあたる人に特別の訓練を必要とすると思われる。

センターはまた、子どもたちに対して総合的な発達をめざす一種のリハビリテーションの働きを果たしたことも、これまでの幼児の施設と異なる特色を持っていた。しかし、ここでもこの「全体的努力」(total effort)の維持、展開のむずかしさを味わうこととなり、多くのセンターは多面的プログラムの一部に片よる実践をとるようになっていった。センターの内外の複雑な教育機能を統合するアイデアを実践の中で成功させる努力は、これからも必要であり、我々もこうした問題解決に参加して協同していくことが望まれているように思う。

#### ヘッド・スタートの評価

プログラムの開始と同時に、さまざまな形の評価研究がすすみ、研究の進行と共にヘッド・スタートの評価自体も変わり、その間に激しい論争がおこったことは、これまで二回にわたつてみてきた(十二月号、一月号参照)。論争は「ヘッド・スタートは効果があるのか?」「効果があるとしたら、どの面にどれ位あるか?」という疑問に対して、明快な解答が出ないために起こってきたのであるが、これらの論争を通して、評価についての考え方

は確かに深まっていったのである。いくつか論点を列挙してみよう。

第一に、一定のプログラムの成果を単に受け手の性差、年齢、社会階層といった変数からとらえる考え方から、一定のプログラムに内在する教師、カリキュラム等の変数を重視した評価研究の必要性が高まったことがあげられる。ヘッド・スタートは、一定のプログラムとしてみるのには、あまりにも変数が多かったため、こうした方向へ議論がすすんでいったと思われるが、最近では、実践の観察による評価研究がすすみ、経過変数に対する関心はますます高まっているといえる。

第二に、盛り沢山の、しかも多面的な内容を含むプログラムを、全体としてどう評価するかという問題も特記されてよい。項別に独立の調査をおこない、最後に集合させればよいのか。それとも、ひとつの教育哲学に基づいて全体をとらえるあり方を工夫すべきか。こうした課題について、ローレンス・フランクは一九六九年にとりあげ、彼自身、全体的人間の発達をチェックするために、ポラー・グラフ等を用いてはどうかと提案しているが、彼の死後、このアイデアが発展した形跡がない。今日、子どもを全体的にとらえて開発したプログラムの数は増えているが、成長の経過を診断する方法も考え方も、十分に発達しているとはい

えず、このような問題に関する論争は、今後も引きつづきおこなっていかなければならないであろう。

第三は、「福祉」の効果、「福祉+教育」の効果の測り方の問題である。福祉的努力の成果というのは、どのような考え方、基準でおこなわれるべきか。「福祉効果」をとらえる基盤ができていなかったため、いつのまにか、「教育」「能力」の側面からプログラム全体を評価するという危険性は、ヘッド・スタートの評価研究の中で随所にみられたところである。

#### ヘッド・スタートの軌道修正

一九六五年の夏、ヘッド・スタートが進水して以来、一九六九年に短期と長期のプログラムの比重を切り変えた他は、その福祉と教育とを統合したプログラムの性格も、児童発達センターで多面的にサービスを与えるというやり方も、基本的に変わらず続いている。しかし、最近技術化社会を不変のものとして、そのシステムに疑問を持たず、ただ適応していくことを求めるあり方は、はたして「子ども」の幸せを求める真の姿といえるだろうか、変わるべきは既存の学校のシステムのあり、社会システムの方ではないかという論評(Keniston, 1975; Silberman, 1971)や、また、このプログラムに参加する子どもは、無秩序な刺激は受け

ていても、組織的で意味のある刺激が少くないという前提に疑問を投げる研究が出てきて、従来のヘッド・スタートの指導原理の検討がせまられてくる (Hunt, 1969; Hunt, et al, 1971)。カッツ (Katz, 1972) も同様の立場から問題を次のように要約している。

「……貧しい子どもたちの方がしばしば豊かな環境の中で育てられているのである。——社会的、言語的、文化的な面での豊かさは、彼らより上の社会階層の子どもたちの環境とその意味、複雑さにおいて等質である。彼らに欠けていると思われるものは、彼らの豊かな環境を彼らにわからせるしつかりした大人の存在である。このような意味で、貧しい子どもたちは「豊かさの中で餓死しており」 (Starve in the midst of plenty) その結果、刺激の少ない状況におかれているように思われる。……」 (Katz, 1972 P. 4)

ヘッド・スタートは、今や技術的検討の時代をおえ、これまですすめてきた基本的な仮説——子どもの幸せは「社会適応」にあり、「外界」からの刺激によって幸せを実現する——を、立ちどまって見直す時期にきているといえる (因みに、アメリカの国際幼児教育協会の一九七六年度の研究テーマは「立ち止まって考え直すところ」である)。これまで十年間のヘッド・スタートの成果は、評価の項でみたように、必ずしも高い評価は得られず、プログラム自体にかつてのような関心もたれなくなってきた。しか

し、幼児教育史上、最大の福祉と教育を統合する実験の成否を、時代影響の濃い仮説の成否の問題とすりかえてはならないはずである。今必要なことは、もう一度子どもの「幸せ」とはどういうことで、どのようにして子どもの幸せを生み出すか、という間に挑戦し、新しい仮説のもとで、教育と福祉を統合する実験を続行することであると思われる。

効果的教育モデルを開発する実験Ⅱプロジェクト・  
フォロー・スルー

はじめに

アメリカの教育プロジェクトには、そのプロジェクトのイメージを短かい言葉に託して表現することが多い。今までみてきたヘッド・スタートもそうであったが、これからみていくフォロー・スルー (Follow Through)、ブランド・ヴァリエーション (The Planned Variation) など言葉もやわらした意味あいをもっている。ヘッド・スタートとは、すべての子どもが能力的に平等

な立場で小学校へ入学できるようにという願いを、競馬用語であらわしたものであり、今度のフォロー・スルーは、ヘッド・スタート計画を上へ引き継いだものとしてのイメージを、テニスで球を送る時にラケットをそのまま上へおしあげるあのフォロー・スルーのイメージとだぶらせた次第である。また、ブランド・ヴァリエーションという言葉は、ヘッド・スタートが自然に変数にとんだプログラムとなった (natural variation) のに對して、最初から異なるプログラムを意識的に選んで、互いの成果をみるという意味あいをあらわしている。本文では、こうした呼称に訳を付けずそのまま固有名詞として使っていくことにする。

## 一 プロジェクト・フォロー・スルーの出現

### (1) フォロー・スルーへの高まる期待

ヘッド・スタートを上(小学校)へ続けようとする意図は、すでにヘッド・スタートの最初のプログラムが終った時点で、関係者に意識されていた (Johnson, 1965)。しかし、ヘッド・スタート計画を上方に拡大することで、その効果を持続させようという積極的な動きが出てきたのは、ヘッド・スタートの長期的影響に疑問がもたれだしてからである。

一九六六年の秋、ジョンソン大統領は、児童発達に関する政策を再編成するための勧告を受けるために、ハントを委員長とするホワイトハウス特別委員会 (The White House Task Force on Child Development) を設立した。この委員会は、同年十二月「児童の権利についての法案」というタイトルの報告書を作成し、大統領に提出した。この報告書の中で、ヘッド・スタート計画を、上と下へ拡張する勧告をしたのである。ジョンソン大統領は、この勧告を受け入れ、翌一九六七年一月十日の大統領教書の中で、はじめてフォロー・スルー計画を公表し、一億二千万ドルの予算で、五十万人の子どもが参加してその年の秋より実施することを明らかにしたのである。さらに、二月十八日の「児童・青年についてのメッセージ」(Johnson, 1967) の発表では、フォロー・スルーを十二項目の政策のトップにあげ、次のようにこのプロジェクトの重要性を強調したのであった。

「……ヘッド・スタートは、子どもの一日のほんの一部を占めただけで、すべてがあまりにも早く終ってしまった。子どもは家に、絶望だけがまわっている家に帰っていくのである。もし、こうした力によって子どもがふみつぶされることのないよう、また、ヘッド・スタートの恩恵が損なわれないようにしたいなら、今以上のものが必要である。フォロー・スルーは最も基本的なものな

のいふやう。……」(Johnson, 1967, p. 152)

フォロー・スルーは、経済機会局の予算で健康・教育・福祉省の教育局が管轄することも決められ、早速、フォロー・スルー全国助言者会 (Follow Through National Advisory Committee) が設立され、バンク・ストリート教員大学のクロップ教授が委員長に就任した。この委員会の仕事は、フォロー・スルー・プログラムを発表させる根拠とプログラムの基準を作ることで、パイロット・プログラムへの準備がこころですすめられたのである。

## (2) フォロー・スルーの変身

一九六七年の十二月、経済機会法が大幅に修正され、ヘッド・スタートとフォロー・スルーの二つのプログラムは、独立に「地域社会行動計画の関連活動」として法的位置を獲得するのであるが、そこでは、フォロー・スルーについて次のような定義が付与されている。

「フォロー・スルーとして知られているプログラムは、以前にヘッド・スタートないしは同様のプログラムに参加した幼稚園・小学校の児童に主として焦点をあて、ヘッド・スタート同様、総合的なサービスと両親参加の活動を用意するために計画されている。経済機会局長は、子どもたちの潜在力を十分に伸ばす目的

で、継続した発達を援助するであろう。……」(P. L. 90-22, Sec. 222 (a), 1967)

法的に、このように明快にフォロー・スルーが定義されたにもかかわらず、また、大統領はその年頭教書で秋からの実施を公約していたにもかかわらず、フォロー・スルーの予算は当初予定していた一億二千万ドルから千五百万ドル、十分の一近くに削減されてしまうのである。このような事態の中で、フォロー・スルーは、はじめの願いをその言葉の中のみとどめて、ここに新しいプログラムとして出発するのである。フォロー・スルーは、大規模な社会的、教育的サービスのプログラムというよりはむしろ、実験的、研究プログラムに変身する。すなわち、「貧しい家庭の子どもたちや彼らの家庭を改善するための新しい方法を調査したり、プログラム実践や評価の手続きを發展させること」(Egbert, 1971) にその中心を移していくのである。

## 二 フォロー・スルー・プログラムの性格

(1) プログラム・スポンサー制度  
ヘッド・スタート計画によって、幼児の教育のカリキュラムは、まずい沢山開発されたが、切磋琢磨して次第に限られた数の質の

## スポンサー名

Joseph Fillerup  
Elizabeth Gilkerson  
Herbert Zimiles  
David Armington  
  
Glen Nimnicht  
  
Ira Gordon  
  
Charles Smock  
  
David Weikart  
  
Donald Bushell  
Jack Victor  
Vito Perrone

Nancy Arnez  
Edythe Williams  
Siegfried Englmann  
Wesley Becker  
Lauren Resnick  
Warren Shepler  
Juan Lujan  
  
Preston Wilcox  
  
Walter Hodges  
  
James Jordan  
Ruth Low Holloway  
Mary Christian  
Fairfid M. Caudle  
  
Edward Johnson  
Anne Price

高いプログラムが出現してきた。フォロー・スルー担当者の最初の仕事は、こうして出てきたプログラムの中から、特別の教育哲学に基づいてカリキュラムを作り、しかもそのカリキュラムを実践する教師の養成もおこなっていて、さらにそのカリキュラムが特定のクラスで採用された場合、その場に向いていって彼ないしは彼女のプログラムの実施法を指導できる人物にプログラム・スポンサーを見出すことであつた。フォロー・スルー担当者の仕事は、すぐれた幼児教育実践指導者を見出し、特に継続教育の必要度の高い地域を選び出し、彼らをそこに派遣する、お膳立てをすることにあつたので、プログラム・スポンサーは、自分のプログラム実施の全責任がまかせられたのである。

次に、実施に当たっては、はじめにフォロー・スルー実施校、五十一校が指定され、別に、十四のプログラム・スポンサーが指名されて、一九六八年の二月、教育局主催のプログラム説明会がもたれた。指定校は、十四のプログラムの中から、自分の学区の特殊性、子どもの特徴、そしてプログラムの哲学、あるいは教員訓練の仕方等を総合して、一つのプログラム・スポンサーを選び、あとは直接、指定校とプログラム・スポンサーとが会合して両者で実験プログラムを検討することが指導された。

その後、指定校は五十校増え、プログラム・スポンサーも六つ増加するにとどまり、フォロー・スルーは小規模な実験プログラムであつたが、二十のプログラムの激しい競争は、幼児・児童の教育へ大きな影響を与えていくのである。二十のスポンサーとは

(つづく)



### スポンサーの所在地

1. University of Arizona: Tucson, Arizona 85712
2. Bank Street College of Education:  
New York, New York 10011
3. Education Development Center:  
Newton, Massachusetts 02160
4. Far West Laboratory for Educational  
Research and Development:  
Imeryville, California 94608
5. University Florida:  
Gainesville, Florida 32601
6. University of Georgia:  
Athens, Georgia 30601
7. High/Scope Educational Research Foundation:  
Ypsilanti, Michigan 48197
8. University of Kansas: Lawrence, Kansas 66044
9. New York University: New York, New York 10003
10. University of North Dakota:  
Grand Forks, North Dakota 68201
11. North-Eastern Illinois State University:  
Chicago, Illinois 60653
12. University of Oregon: Eugene, Oregon 97463  
Eugene, Oregon 97463
13. University of Pittsburg:  
Pittsburg, Pennsylvania 15213
14. Southwest Educational Development Laboratory:  
Austin, Texas 78701
15. Afram Associates Inc.:  
New York, New York 10035
16. Georgia State University:  
Atlanta, Georgia 30303
17. California State Department of Education:  
Sanrament, California 95814
18. Hampton Institute: Hampton, Virginia 23368
19. Responsive Environments Corporation:  
Englewood Cliffs, New Jersey 07632
20. Southern University and A&M College:  
Baton Rouge, Louisiana 70813